

神功皇后の朝鮮半島征伐譚

——『日本書紀』『八幡愚童訓』から『本朝女鑑』へ——

金 永 昊

一、はじめに

『古事記』や『日本書紀』には多くの日朝関係記事が記されている。その中で百済の和邇吉師（わにきし）（『古事記』による）が日本に『論語』十卷と『千字文』一巻を伝えたという記述は、韓国にとって現在に至るまで日本に対する優越意識の原点となっている。反対に、日本の神功皇后による朝鮮半島征伐譚は、『日本書紀』と『古事記』に始まり、鎌倉時代中・後期成立と推定される『八幡愚童訓』、応安年間（一三六八～七五）の成立とされている『太平記』、そして文禄・慶長の役を題材にした『高麗日記』（写本、十六世紀末頃成立か）・『吉野甚五左衛門覚書』（写本、十七世紀初期頃成立か）・『九州治乱記』（写本、一七二〇）・『絵本朝鮮征伐記』（一八五三・四刊）、そして随筆集『塩尻』（二六九七～一七三三執筆）の巻五十三、浄瑠璃『山城国畜生塚』（一七六三初演）、明治時代の『朝鮮暴徒実記』（一八八二

刊）、そして『小学作文全書』（文学社、一八八三刊）や『小学帝国史』（神戸書店、一八九三刊）などに至るまで、小説・随筆・芸能・教科書などの様々な書物に記されている。これは、日本の朝鮮に対する優越意識の原点として、豊臣秀吉の朝鮮出兵をはじめ一九一〇年の韓国併合に至るまで、日本が朝鮮半島を支配する必然性を提供してきたといえよう。

そのうち、本稿で考察する『本朝女鑑』は寛文元年（一六六一）に刊行された浅井了意の仮名草子である。本書は漢の劉向の『列女伝』を模倣して、賢明・仁智・節義・貞行・弁通・女式の六篇で構成されており、「本朝」の歴史において「女」性の中で「鑑」となるべき人物八十五人を選んで紹介した女訓書である。当時の徳川幕府は儒教を官学にし、庶民に対する教化政策に努めており、北村季吟の『仮名列女伝』（二六五五刊）、黒沢石斎の『本朝列女伝』（一六六八刊）、作者未詳の『賢女物語』（一六六九刊）などのような女訓書の

刊行が活発に行われた。『本朝女鑑』は、その中でも最も代表的な作品の一つに数えられる。

本話に関する先行研究は、浜田啓介氏が「『本朝女鑑』の虚構(下)」(『国語国文』第五十六卷八号、京都大学国語国文学会、一九八七)で「神功皇后」の典故として、『日本書紀』第八卷「仲哀天皇」条と第九卷「神功皇后」条、『八幡愚童訓』、『太平記』などを指摘しているのが唯一である。浜田氏が指摘した「神功皇后」の典故については筆者も同意している。しかし、了意が『日本書紀』『八幡愚童訓』のような先行作品を活用して、どのように女訓書として再編成したか、また、本話を創作するにあたり、了意のいかなる価値観が投影されたか、ひいては当時の時代的な背景の中で本話はいかなる意味を持っていたか等については未だ十分な検討が行われていない。

了意は仮名草子で最も多くの作品を残した作者であり、彼の作品は仮名草子の各ジャンルを代表する作品として高く評価されている。また、北条秀雄氏が『改訂増補浅井了意』(笠間書院、一九七二)で述べたように、当時の書肆では書籍を多く販売するために、作者を当代最大の人気作者であった了意と偽って出版する場合も多かったようである。つまり、了意が執筆したとすればとりあえずある程度の部数は保障されたのであり、それはその作品を読む読者も多かったことを意味する。

「雑史」としての性格を持つ『本朝女鑑』、そしてその中に収録されている「神功皇后」は、歴史学のほうではあまり顧みられておらず、文学的にも検討されることが少なかった。しかし、当時のベストセラー作家であった了意が執筆し、それが整版本として出版され、流布することにより、当時の日本人における朝鮮観の形成にも非常に重要な役割を果たしたのは疑い得ないことであろう。

なお、『本朝女鑑』のテキストとしては黒川真道編『本朝女鑑』(『日本教育文庫孝義篇(下)』所収、日本図書センター、一九一〇)を用いることにする。

二、 出典の利用様相

それではまず、本話の全体的な内容を出典とともに簡単に比較してみよう。出典を記すにあたり、『日本書紀』「仲哀天皇」条は〈仲〉、『日本書紀』「神功皇后」条は〈神〉、『八幡愚童訓』は〈八〉、『太平記』は〈太〉とした。

また、征伐の対象として『日本書紀』では新羅、『八幡愚童訓』では異国又は高麗、『本朝女鑑』では新羅又は三韓となり、諸書によって少しずつ異なっているが、本稿ではそれを統一せず、各書に載っている征伐の対象をそのまま記すことにする。

番号	出典	『本朝女鑑』「神功皇后」
①	<p>〔神〕神功皇后は仲哀天皇二年に皇后の位に就いた。幼い時から聡明で知恵があり、容貌は美しかった。</p>	<p>神功皇后は仲哀天皇二年に皇后の位に就いた。幼い時から美しく賢明で、思慮が深かった。</p>
②	<p>〔仲〕仲哀天皇は大中媛を妻として迎え、麿坂皇子と忍熊皇子が生まれた。この時、熊襲が天皇の命令に背き、朝貢を行わなかったため、天皇は熊襲を征伐しようとした。</p>	<p>仲哀天皇は大中媛を妻として迎え、麿坂皇子と忍熊皇子が生まれた。この時、熊襲が天皇の命令に背き、朝貢を行わなかったため、天皇は熊襲を征伐しようとした。</p>
③	<p>〔仲〕神功皇后は神託を受け、仲哀天皇に「熊襲は不毛の地であるため、それよりは金・銀・宝がある国新羅を討つべきです。そうすれば熊襲も服従するはずですよ」と助言する。</p>	<p>神功皇后は仲哀天皇に新羅・高麗・百済の三国を服従させ朝貢をさせれば、熊襲は自ら服従するであろうと助言する。</p>
④	<p>〔仲〕仲哀天皇は神の言葉を疑い、熊襲を攻撃しようとしたが、何も成果がなかった。神の言葉を聞かなかったため、翌年、病気になる、死んでしまった(一説では、熊襲の敵軍が放った矢に当たって死んだとも言われる)。</p>	<p>仲哀天皇は神功皇后の助言を聞かず熊襲を攻撃しようとしたが、敵軍の大將である塵輪が放った矢に討たれて戦死する。</p>
⑤	<p>〔神〕神功皇后は天事代などの多くの神々を呼び、熊襲を征伐する。</p>	<p>神功皇后は天事代などの多くの神々を呼び、先に熊襲を征伐すると、大將である塵輪は死に、敵軍は降参する。</p>
⑥	<p>〔神〕神功皇后は海の中の磯良をはじめとした多くの神々を呼び、新羅へと出兵する準備を整える。</p> <p>〔八・太〕神功皇后は海の中の磯良をはじめとした多くの神々を呼び、干珠と満珠を借りて、新羅へと出兵する準備を整える。</p>	<p>神功皇后は海の中の磯良をはじめとした多くの神々を呼び、干珠と満珠を借りて、新羅へと出兵する準備を整える。</p>

番号	出典		『本朝女鑑』「神功皇后」
⑦	<p>〈神〉 神々のおかげで神功皇后の兵士たちは新羅に無事に到着する。</p> <p>〈八〉 敵軍が強く抵抗し、戦闘が行われる。高麗の王が神功皇后を嘲ると、神功皇后は副將軍高良に命令し、干珠を海に投げさせる。すると海は陸地になり、敵軍が陸路で攻撃して来る。神功皇后が高良に満珠を投げさせると、敵軍はみな水没して死ぬ。</p>	<p>神々のおかげで神功皇后の兵士たちは新羅に無事に到着する。新羅の沖で神功皇后が武内宿禰に満珠を海に投げさせると、大きな波が起る。新羅全体が水に沈んでしまふと日本軍の船は簡単に新羅国の中まで入って行く。新羅の王が降伏し、朝貢することを約束すると武内宿禰は干珠を海に投げる。すると、陸地に満ちていた海水がすぐ干上がる。</p>	
⑧	<p>〈神〉 新羅の王は降伏し、朝貢を捧げることにする。神功皇后は金銀の国から各種様々な金・銀などをはじめとした宝物を持ち帰る。高麗と百済もこのことを聞き、神功皇后のもとを訪ねて降伏する。</p> <p>〈八〉 異国の王たちは戦争に敗れると、日本の犬になって日本を守護し、朝貢することを約束する。神功皇后は大きな磐石の上に、「新羅の大王は日本のいぬなり」と書く。</p>	<p>神功皇后が新羅の地に上がると、高麗と百済がこのことを聞いて神功皇后のもとを訪ねて降伏し、各種様々な宝物を捧げる。神功皇后が磐石の上に、「新羅・高麗・百済の大王はわが日本の犬なり」と弓の筈で書くと、後代までその文字は消えなかつたという。</p>	
⑨	<p>〈神〉 神功皇后が都へと戻る時、麿坂皇子と忍熊皇子が謀反を起こしたが失敗する。〈後略〉</p>	<p>神功皇后が都へと戻る時、麿坂皇子と忍熊皇子が謀反を起こしたが失敗する。〈後略〉</p>	

右の表を見ると、前半は『日本書紀』を基にしており、①に当たる神功皇后の人物造形に関しては第九卷「神功皇后」条、②以下は第八卷「仲哀天皇」条を出典とし、『日本書紀』における記述の順序を逆にした上で利用している。

また、後半は、『八幡愚童訓』を基本的な骨格としながら、⑥で体中に貝殻などが付着した醜い形的神磯良の出現及びその描写は『太平記』からも着想を得て構成していることが分かる。

それでは、右で示した表を参考にしながら、了意はどのような方法で本話を構成したのか検討してみることになしよう。

三、 神功皇后の人物造形の方法

まず、『本朝女鑑』の「神功皇后」に見られる特徴として、神功皇后の人物造形の方法が『日本書紀』とは異なるという点が挙げら

れる。まずは、『日本書紀』の該当部分を引用する。

なお、本稿での『日本書紀』の本文引用は、坂本太郎外三人校注『日本書紀（上）』（『日本古典文学大系』第六十七卷、岩波書店一九六七）を利用することにする。また、神功皇后に関する記事は『古事記』にも登場するが、『古事記』は簡略に記されており、出典として断定しにくいいため、議論の対象から外した。

○第九卷「神功皇后」

氣長足姫尊は、稚日本根子彦大日天皇の曾孫、氣長宿禰王の女なり。母をば葛城高頼媛と曰す。足仲彦天皇の二年に、立ちて皇后に為りたまふ。①幼くして聡明く叡智しくいまず。貌容壯麗し。父の王、異びたまふ。¹

○第八卷「仲哀天皇」

秋九月の乙亥の朔己卯に、群臣に詔して、熊襲を討たむことを議らしめたまふ。時に、神有して、皇后に託りて誨へまつりて曰はく、「天皇、何ぞ熊襲の服はざることを憂へたまふ。是、譬穴の空国ぞ。豈、兵を挙げて伐つに足らむや。茲の国に愈りて宝有る国、譬へば処女の睞の如くにして、津に向へる国」
 1 氣長足姫尊、稚日本根子彦大日々天皇之曾孫、氣長宿禰王之女也。母曰葛城高頼媛。足仲彦天皇二年、立為皇后。幼而聡明叡智。貌容壯麗。父王異焉。

あり。眼炎く金・銀・彩色、多に其の国に在り。是を栲衾新羅国と謂ふ。若し能く吾を祭りたまはば、曾て刃に血らずして、其の国必ず自づから服ひなむ。」②天皇、神の言を聞しめして、疑の情有します。便ち高き岳に登りて、遙に大海を望るに、曠遠くして国も見えず。是に、天皇、神に對へまつりて曰はく、「朕、周望すに、海のみ有りて国無し。豈、大虚に国有らめや。誰ぞの神ぞ徒に朕を誘くや。〔中略〕然るに、天皇、猶し信けたまはずして、強に熊襲を撃ちたまふ。得勝ちたまはずして還ります。²

右の引用文の①で記されているように、神功皇后は「聡明」「叡智」の女性として設定されている。「叡智」について、『日本国語大辞典』（第二版、小学館）の説明には、「すぐれた知恵。真理を洞察する精神能力」と書かれており、これに対する用例についても『凌雲集』や『太平記』などの文献が提示されていることから、了意も「叡智」について、右のような意味として理解していたと思われる。したがって、了意は『日本書紀』の神功皇后について、「幼少の時から聡明て、秋九月乙亥朔己卯、詔群臣以議討熊襲。時有神、託皇后而誨曰、「天皇何憂熊襲之不服。是譬穴之空国也。豈足拳兵伐乎。愈茲国而有宝国、譬如処女之睞、有向津国。眼炎之金・銀・彩色、多在其国。是謂栲衾新羅国焉。若能祭吾者、則曾不血刃、其国必自服矣。」〔中略〕天皇聞神言、有疑之情。便登高岳、遥望之大海、曠遠而不見国。於是、天皇對神曰、「朕周望之、有海無国。豈於大虚有国乎。誰神徒誘朕。〔中略〕然天皇猶不信、以強撃熊襲。不得勝而還之。」

で優れた知恵があり、容貌が美しい人物」として理解していたと考えられよう。

しかし、第八卷の引用文を見ると、熊襲が謀反を起こして、朝貢を捧げないため、仲哀天皇が熊襲を征伐しようとした時、神功皇后は神託を受ける。そして、熊襲は不毛の地であるため、金・銀・宝物が多い「財宝国」、つまり新羅を征伐することを助言する。

したがって、了意は、『日本書紀』第八卷で神功皇后が神からの神託を受け、仲哀天皇に助言したというのは、第九卷の①で言及した「聡明」「叡智」の人物設定とは矛盾すると考えたのではないだろうか。それは、『本朝女鑑』で神功皇后について、次のような人物として設定したことからも窺える。

神功皇后は、開化天皇には御曾孫、気長の宿禰の王の御娘、御母をば葛城の高瀬媛と申す。仲哀天皇御位につきて、二年といふ春、①皇后に立給ひて、天下の政をたすけ給ふ。御年いまだ

幼くおはしましける時より、御かたち世にすぐれ、御智慧いたりて賢しく、はかりごと深うして、よく道を行ひ給ふ。これよりさきに、天皇の御叔父彦人大兄の王の娘、大中媛をむかへて、此御腹に麿坂皇子、忍熊皇子をうみ給ふ。その年の春二月に、越前の角鹿に幸ありて、行宮をつくりて住み給ふ。これを筒飯宮と申す。此年熊襲の国、天皇にそむきて貢を奉らず。天皇

大に怒り給ひ、熊襲をうたんとて軍兵をあつめ、舟にめして筑紫に下り給ふ。皇后のたまはく、「②熊襲はいやしき国なり。さのみに反くことを憂へ給ふべからず。これにまさりてめでたき国あり。此日本よりは、西北の方に当れり。名づけて、新羅国と名づく。その次に高麗国あり。その次に百済国あり。それより次第に、国多くありといへども、まづこの三の国を打したるがへて、貢調を奉らすべし。この三の国だに從はざ、熊襲はおのづから從ふべし」との給ふ。

右の引用文の①で神功皇后は、幼少の時から容貌が美しく、知恵があり、賢く、思慮が深く、「よく道を行」い、天皇の政事も手伝っている人物として設定されている。これは、『日本書紀』①をもとにしたもので、「賢明」なる人物としての神功皇后像を忠実に受け継いだ設定である。

これに続いて、了意は『日本書紀』にはない②の文章を新たに加えている。つまり、神功皇后は仲哀天皇に、「熊襲はいやしき国」であるため、心配することがないこと、熊襲の西北のほうに「めでたき国」の新羅があり、それに続いて高麗・百済があるとし、この三国を先に征伐し朝貢させれば、熊襲は自ら降参するであろうと助言している。ここで神功皇后は『日本書紀』のように神から神託を受けて仲哀天皇に助言をしているのではない。あくまでも自分の洞

察力によって日本周辺の国際情勢と動向を把握し、判断したうえで、新羅征伐の正当性を仲哀天皇に提示しているものであり、これはまさに本篇でいう「賢明」な人物に符合する人物として描かれているのである。

このような改変の結果、仲哀天皇が戦死する原因にも違いが見られる。まず、『日本書紀』では②のように神託を疑ったため戦死することになっている。それが、『八幡患童訓』では先に異国が侵略したことにし、塵輪という「鬼神」の首を射て「かしらと身とは二つに成」ったが、その後は『日本書紀』の割注に書かれている「一に云はく、天皇、親ら熊襲を伐ちたまひて、賊の矢に中りて崩りましぬといふ」を利用して、「ながれ矢」に当たって死んでしまったことになっている。それが、『本朝女鑑』の「神功皇后」では、仲哀天皇が敵軍の矢に当たって死んだ理由は、賢明なる神功皇后の助言を聞かなかつたためであるとしているのである。

したがって、了意が『日本書紀』第九巻の内容を先に置き、次に第八巻を配置するというふうな構成を逆にしたのは、先に神功皇后を「賢明」な人物として設定したうえで、その後に仲哀天皇に助言をし、そして仲哀天皇は「賢明」な神功皇后の助言を聞かなかつたため死ぬことにして、内容を有機的に繋げるためであったのである。

四、『日本書紀』の新羅認識と了意の道德観

常吉由樹子氏は「伽婢子」恋愛譚に見る了意の性愛観（『活水日文』第三十九号、二〇〇〇）で、了意の『伽婢子』における恋愛譚を例にし、原作の『剪灯新話』に現れた男女の露骨的な性愛描写が了意の作品には婉曲な表現に変わっていることを挙げ、了意なりの道德観ないしは価値観が反映されていることを指摘した。

筆者も氏の説には同意している。ここで了意の作品に現れた道德観と思われるところについてより幅広く検討してみると、『狗張子』巻五の第六話「杉谷源次付男色之弁」に収録されている男色譚については「非道」であるため、「まことに慎むべき事」とし、『江戸名所記』巻七の第九話「吉原」では遊郭の弊害を指摘している点などが見出だされ、自分の道德意識が至るところに現れていることは明らかである。

『本朝女鑑』の場合をみると、木越治氏は「恋と死―西鶴作品の「語り」を通して―」（『国文学解釈と鑑賞』第七十三卷三号、二〇〇八）で、巻一の第一話「倭迹々日百襲媛命」の場面を例として挙げ、

『本朝女鑑』（寛文元年刊）巻一の一には、『日本書紀』崇神天皇十年の条によって四道將軍を諸国につかわす際の詔が引用さ

れているが、原文に

因りて詔して曰はく、「若し教を受けざる者あらば、乃ち兵を挙げて伐て」とのたまふ。

とあるところに、

かさねてのたまはく、「諸国のともがらそむき奉るものあらば、みなことごとく打べし。したがひ奉らんといふものはころすことなかれ」

という傍線部のごとき一文が書き加えられている。

とし、『生』を重んじようとする姿勢があらわになってくる」と指摘している。筆者はこのように「生」を重要視したのも、了意の道徳観が反映されたものではないかと考えている。

このようなことを念頭に置いて、『日本書紀』で新羅を征伐しようとしている目的が『本朝女鑑』ではどのような理由に改変されているか検討してみたいと思う。このような作業を通して、了意が『日本書紀』に記されている神功皇后の新羅征伐記事をどのように認識していたかということと、『本朝女鑑』に記されている神功皇后の記事に了意のいかなる価値観が反映されていたかを探る手がかりが得られると思われる。

では、『日本書紀』巻九の「神功皇后」条を例にして、新羅への認識、そして、征伐の目的、結果について、筆者が注目したい部分

を次に引用する。

○以為さく、崇る所の神を知りて、財宝の国を求めむと欲す。³

○「朕、西財の国を求めむと欲す。若し事を成すこと有らば、河の魚鉤飲へ」とのたまふ。⁴

○上は神祇の靈を蒙り、下は群臣の助に藉りて、兵甲を振して嶮き浪を度り、艦船を整へて財土を求む。⁵

○「初め神の教を承りて、將に金銀の国を授けむとす。又三軍に号令して曰ひしく、『自ら服はむをばな殺しそ』といひき。今既に財の国を獲つ。亦人自づから降ひ服ひぬ。殺すは不祥し」とのたまひて、乃ち其の縛を解きて飼部と

たまふ。遂に其の国の中に入りまして、重宝の府庫を封め、図籍文書を收む。⁶

○仍りて金・銀・彩・色、及び綾・羅・縑・絹を齎して、八十艘の船に載れて、官軍に従はしむ。是を以て、新羅の王、常に八十船の調を以て日本国に貢る、其れ是の縁な

以為、知所崇之神、欲求財宝国。

朕西欲求財国。若有成事者、河魚鉤飲。

上蒙神祇之靈、下藉群臣之助、振兵甲而度嶮浪、整艦船以求財土。

初承神教、将授金銀之國。又号令三軍曰、「勿殺自服」。今既獲財国。亦人自降服。殺之不祥、乃解其縛為飼部。遂入其國中、封重宝府庫、收図籍文書。

り。

右の引用文から分かるように、『日本書紀』によると日本は新羅を「財宝の国」「財国」「財土」「金銀の国」と認識していた。しかし、了意の「神功皇后」では、「財宝の国」または「金銀の国」などのような表現はもちろん、新羅から金・銀・絹を持ち帰ったという内容は全て記されていない。

それでは、了意はどうしてこの部分を削除したかが問題になる。その手がかりとして、『本朝女鑑』の三年後に刊行された了意の『將軍記』第十七巻の「豊臣秀吉記」を見ると、次のように記されている。なお、本稿における『將軍記』のテキストは、黒川真道編『將軍記(二)』(『国史叢書』所収、友文社、一九一六)を利用することにする。

秀吉公思ひ給はく、古より此方、支那・震旦より、我が朝を取らんとせし事は度々にして、日本より異国を打つ事は、神功皇后の昔、新羅・百濟・高麗の三韓を征伐し給ひてより此方、数千歳たぬしに例なし。

右の引用文を見ると、文祿・慶長の役以前に中国が日本を攻撃したことはよくあったと記されている。しかし、実際には高麗・モンゴルの連合軍が日本を攻撃したこと以外は、日本は歴史上一度も外国からの侵略を受けたことがない。したがって、「支那・震旦より、我が朝を取らんとせし事は度々にして」という表現は高麗・モンゴルの連合軍による日本攻撃が当時の日本にとってどれだけ大きな衝撃として残っていたかを窺わせる。そして、これと共に注目したいのは、高麗・モンゴルの連合軍による日本攻撃と対比的に、日本が先に他国を攻撃したのは神功皇后のただ一回のみであると記されていることである。

それでは、了意が『日本書紀』に書かれている神功皇后の新羅征伐記事について、高麗・モンゴルの連合軍による日本攻撃と同じようなレベルで言及している理由は何であろうか。それは神功皇后がたとえ神からの神託を受けたとしても、結果的に金・銀・宝物を奪い取り、更には地図・戸籍・書籍まで持ち帰ったことについて、何も正当な理由が記されていないためであると考えられる。つまり、了意の道德観によれば、『日本書紀』の神功皇后の行動は盜賊行為としてしか理解出来ないものであったと考えられる。

したがって、了意は神託の部分を削除し、神功皇后が日本を巡る国際情勢を把握・判断し、新羅を征伐することの必然性を提示する内容に変更したものと考えられる。神功皇后が、

7 仍齋金銀彩色及綾・羅・縵絹、載于八十艘船、令從官軍。是以、新羅王、常以八十船之調貢于日本国、其是之縁也。

敵に向ひ旗をすゝめん時、軍兵ども欲心にひかれて、財に目をなかかけ、味方の備を乱したらば、敵の虜となるべし。よく慎しめや。私を構へ、戦におこたりあらば、罪に行ふべし。

とし、兵士たちに「財に目をかけ」ずに、「私を構へ、戦におこた」らないよう強調するのは、『日本書紀』における神功皇后が、新羅を征伐しに行った目的が金・銀・宝物を奪い取ることにあったことを意識したためであると考えられる。したがって、『日本書紀』では「財宝の国」新羅征伐だけが重要な目的となっていて、高句麗と百済への征伐はそれほど重要に扱われていなかった。これは、羅唐連合軍が百済を攻撃すると、日本は百済に援軍を送るなど、百済とは友好関係にあり、反対に百済を滅亡させた新羅に対しては敵対意識があったことが反映されたためであろう。それが『八幡愚童訓』になると、「異国」の日本攻撃が先に配置され、神功皇后の「異国征伐」の目的が仇討ちになる。そして、『本朝女鑑』になると最初から征伐の対象を新羅へと限定しないで、異国熊襲が「おのづから従」うためには「この三国」を従わせ、朝貢を受ける必要があり、このためにはまず新羅を征伐しなければならぬとして再設定されていたのである。

五、満珠と干珠の利用様相

次に、第二節で提示した表を見ると、⑤から⑧までは『日本書紀』よりも『八幡愚童訓』からより大きな影響を受けていることが分かる。例えば、『日本書紀』では、敵軍の中に、力強くて体には翼があり、空中をよく飛び回る「羽白熊鷲」という妖怪が登場する。それが『本朝女鑑』では「塵輪ちりりん」、『八幡愚童訓』では「塵輪ちりりん」というものになり、振り仮名は異なるものの結局同じ対象を指していることが分かる。それだけでなく、『日本書紀』には登場しない「満珠」(波が大きく立ち上がって国全体を水に沈めさせる玉)と「干珠」(水を干上がらせる玉)という二つの玉を使うこと、神功皇后が大きな磐石に弓の筈で「新羅・高麗・百済の大王は、わが日本の犬なり」と書いたことまで『八幡愚童訓』と一致している。

しかし、了意は『八幡愚童訓』の内容をそのまま利用したわけではなかった。その代表的な例として、新羅を攻撃する時に、海の中である阿刀部の磯良から借りて使った「満珠」と「干珠」の使用順序を挙げることが出来る。

それでは、次に筆者が問題としたい『八幡愚童訓』の内容を引用する。なお、本稿における『八幡愚童訓』のテキストは小野尚志『八幡愚童訓諸本研究―論考と資料―』(三弥井書店、二〇〇一)所載の甲類の寛文版を利用することにする。

こ、に高麗の国王大臣大きに嘲哂しければ、すなはち副將軍高良におほせて白色の玉をうみへ入給ふ。此玉をなげ給ふゆへにこそ高良をば玉垂の宮とは申けれ。旱珠すでにうみに入しかは、うしほみな干て陸地となる。異国のぐんびやうよろこんで、ふねよりおりてせめ来る。①日本のふねをば小龍下にあるゆへに、水を出してうかへたり。異賊をはるかに見くだして、②又青色の玉を入給ふに、海水みなきりて眇々たり邦野は湛々たる江湖たり。草木みなみくづとなり、敵軍すでに魚となる。これによて、異国の王臣たへかねてちかひことをたて、申さく、「我等日本の犬となり日本をしゆごすべし。毎年八十艘の御年貢をそなへ奉るべし。まつたくけだすべからず。若敵心あらは天道のせめを蒙べし」と申時、③皇后御弓のはづにて大ばんじやくの上に「新羅国の大王は日本のいぬなり」と書つけさせたまひ御銚を王宮の門前に立をかせ給ひて御帰朝ありけり。

神功皇后が新羅へと進撃した時、敵軍は「十万八千艘に四十九万六千余人」の兵士が乗って、鶴翼陣を作ったり、魚鱗陣を作ったりしながら、まるで雨のように矢を放ったという。このように強く抵抗しながら、右の引用文のように高麗の王が神功皇后を嘲ると、神功皇后は副將軍高良に命じて、干珠を海に投げさせた。すると、海が陸地になったので、敵軍は船から降りて陸路で攻撃して来たと記

されているが、ここで一つ状況的に矛盾するところがある。それは、現在戦闘が行われている所は海の上であり、神功皇后が高良に命じて干珠を投げさせることで、戦場となっている海が陸地になってしまったならば、神功皇后の船は一体どのような状況になるのかということである。そこで、『八幡愚童訓』では①から分かるように、「日本のふねをば小龍下にあるゆへに、水を出してうかへたり」としている。「小龍下にある」ということが具体的に何をいうのか判然としないが、『八幡愚童訓』の場合、このような状況を作り出すことによつて、陸地の上に船が立っているという矛盾を避けたのである。

次に、敵軍が陸路で攻撃して来ると、②から分かるように、高良が満珠を投げたら陸地は再び海になり、高麗の兵士たちは降伏した。その後の状況については③から分かるように、「皇后御弓のはづにて大ばんじやくの上に『新羅国の大王は日本のいぬなり』と書つけさせたまひ御銚を王宮の門前に立をかせ」たのである。この状況を詳しく見ると、神功皇后が高麗の地の中に入ってこそ磐石の上に文章を書くことが出来るはずであるが、『八幡愚童訓』の記事では神功皇后が新羅の陸地上がった記述はなく、海の上に磐石もやはり、高麗の王が住んでいる王宮もそこにあるような記述になってい

8 「八幡愚童訓」は神功皇后が高麗の兵士たちと戦争を行うこととして設定されており、時代的には矛盾する。これは恐らく、『八幡愚童訓』の成立時期が高麗・モンゴルの連合軍による日本攻撃の後であるため、征伐の対象を高麗として設定したものと考えられる。

る。

このようなあいまいな表現、または論理的な矛盾を避けるために、了意は干珠と満珠の使用順序を換えたのである。そして、敵軍との戦いの過程も最小限に省略した。「神功皇后」の記述は次の通りである。

冬十月にいたりて、飛廉は追風をおこし、陽侯は波をあげ、海中の大鱼共は、龍神の仰によりて、御舟を波の上にしはさみ、時のまに、新羅の国につきたまふ。武内宿禰まづ満珠を海になげしに、潮大にみちて国中をひたす。〈中略〉まづ兵船一万余艘をもつて、防ぎけれどもかなはず。満る潮にひかれて、逃るとはなしに都に入来る。皇后の舟は、追かくるにもあらずして、敵の跡より都の内へ乱れ入ければ、新羅王を初めて、臣下国民みな肝を消し、神をうしなひ、あわてふためく。〈中略〉大王すなはち国の璽をさ、げ、皇后の御舟にむかひ、頭を叩きて申さく、「今より後、永く日本に従ひ臣下となり、年毎のみつぎものを奉らん」とて、大誓言をいたしければ、武内宿禰また干珠を海になげ入るゝに、その潮立どころに干あがりたり。皇后、新羅の地にあがらせ給ひ、鋒を大王の門にたて給ふ。高麗百濟聞およびて、皆まありて降参し、もろくの宝物をさ、げたり。皇后は、大王の門外なる磐石の面に、「新羅高麗百濟

の大王は、わが日本の犬なり」と、弓の筈にてかき給ふに、後までもその文字きえず。皇后それより日本に帰陣あり。

右の引用文を見ると、武内宿禰が先に投げたのは満珠であり、新羅の国全体が水没すると、新羅の兵士は船一万余艘で防ごうとした。しかし、溢れる波に流されるまま新羅の兵士は逃げもせず、神功皇后の兵士は追うこともなく、神功皇后の軍は新羅の都城の中に入り込んだのである。ここで新羅の王が恐れをなして降伏すると、神功皇后は武内宿禰に命令して干珠を投げさせた。すると、海水はすぐ干上がり、神功皇后は新羅の地が上がって磐石の表面に「新羅高麗百濟の大王は、わが日本の犬なり」と書いたのである。このように、了意は干珠と満珠の使用順序を逆転させることによって、『八幡愚童訓』の「ふねをば小龍下にあるゆへに、水を出してうか」なんていたところや、神功皇后が陸地が上がっていないというあいまいで矛盾する内容を合理的な内容に改変したのである。

一方、『八幡愚童訓』には戦闘の様子が詳しく書かれているが、『本朝女鑑』『神功皇后』では、「満る潮にひかれて、逃るとはなしに都に入来る。皇后の舟は、追かくるにもあらずして、敵の跡より都の内へ乱れ入れば」と簡潔な言及があるのみである。この理由として考えられることの一つは、先に引用した木越治氏の論考で言及されているように、「生」を重視する了意の姿勢が反映されていると

いうこと、そしてもう一つは、両者の編纂態度が異なっていたということである。『八幡愚童訓』は高麗・モンゴルの連合軍による日本攻撃の後に成立し、日本の国内でナシヨナリズムが高潮していた時であったため、高麗の兵士をどのように破るかという点に重点が置かれていた。しかし、『本朝女鑑』は女性を啓蒙させるために編纂されたもので、読者も主に女性であった。したがって、戦争の様子に関する詳しい記述よりは神功皇后の朝鮮半島征伐自体に関する知識を伝えることに重点が置かれていたのである。

六、おわりに

『日本書紀』に書かれている神功皇后の朝鮮半島征伐の記事は神功皇后が神託を受け、新羅を攻撃し、金と銀をはじめ、多くの宝物と絹を持ち帰ったという内容である。これが史実であるかどうかという点に筆者の関心はない。しかし、この話が(はじめに)で紹介した多くの書物に収録されることにより、前近代の日本人はこの話を史実として捉えていたか、そうでなくともこのような知識が広く共有されることで、韓国に対する優越意識が醸成されていたことは確かであろう。特に、この作品が当時のベストセラー作家であった了意の手になるものであり、整版本として出版されたことは、当代、及び後代に多大な影響を及ぼすのに十分であったと思われる。

そこで本稿では、了意が『日本書紀』と『八幡愚童訓』のような先行作品をいかなる形で改変しながら文学化したかについて考察を試みた。

例えば、①『日本書紀』での神功皇后は神託を受けて、新羅を征伐することを仲哀天皇に助言しているが、了意は日本を取り巻く周辺の国際情勢と動向を把握し、新羅征伐の当為性を提示するという「賢明」で人間的な能力が強調された人物として神功皇后を設定している。そして、②『日本書紀』の場合、新羅を征伐する目的が単に金・銀をはじめとした各種宝物を持ち帰ることになっていたが、了意は神功皇后の盗賊行為と思われるところを削除しており、そこには了意なりの道徳観及び『日本書紀』に対する認識を伺うことが出来る。また、③『八幡愚童訓』における戦闘場面の矛盾を改め、満珠と干珠の利用順序を逆転させることによって、あいまいさと矛盾をきたさぬように再編成している。

本稿で筆者は、『本朝女鑑』の「神功皇后」のみを対象に考察を試みたが、今後は『本朝女鑑』に記載されている八十五人の女性全てを考察し、どのような編纂意図が反映されているかについて究明する作業が必要であると思われる。それだけでなく、視野をさらに広げ、中国や朝鮮の女訓書と比較した時、どのような特徴が見出されるかを検討することもこれからの課題である。

【付記】

本稿は『本朝女鑑』『神功皇后』考察―『日本書紀』『八幡愚童訓』の利用様相を中心に―（『日本思想』第二十二号、韓国日本思想史学会、二〇一三）として韓国で掲載された筆者の論考を日本語に改め、大幅に加筆・修正したものである。

〈参考文献〉

- 拙稿「伽婢子」の比較文学的考察（『日本学研究』第三十五輯、檀国大学日本研究所、二〇一三）
 崔官「三韓の王は日本の犬なり」について（『日本語文学』第八輯、韓国日本語文学会、二〇〇〇）
 青山忠一『仮名草子女訓文芸の研究』（桜楓社、一九八二）
 朝倉治彦編『狗張子』（『仮名草子集成』第四卷、東京堂出版、一九八三）
 小野尚志『八幡愚童訓諸本研究―論考と資料―』（三弥井書店、二〇〇一）
 木越治「恋と死―西鶴作品の「語り」を通して―」（『国文学解釈と鑑賞』第七十三卷三号、二〇〇八）
 黒川真道編『將軍記（二）』（『国史叢書』所収、友文社、一九一六）
 編『本朝女鑑』（『日本教育文庫孝義篇（下）』所収、日本図書センター、一九一〇）
 小島憲之外四人校注・訳『日本書紀』（『新編日本古典文学全集』第二卷、小学館、一九九四）
 坂本太郎外三人校注『日本書紀（上）』（『日本古典文学大系』第六十七卷、岩波書店、一九六七）

- 常吉由樹子「『伽婢子』恋愛譚に見る了意の性愛観」（『活水日文』第三十九号、二〇〇〇）
 長谷川端校注・訳『太平記』（『新編日本古典文学全集』第五十七卷、小学館、一九九八）
 浜田啓介「本朝女鑑」の虚構（上）（『国語国文』第五十五卷七号、京都大学国語国文学会、一九八六）
 「本朝女鑑」の虚構（下）（『国語国文』第五十六卷八号、京都大学国語国文学会、一九八七）
 北条秀雄『改訂増補浅井了意』（笠間書院、一九七二）
 横田健一『日本書紀研究（第七冊）』（塙書房、一九七三）